

## 本連載における「翻訳」について ⑥

前回(7月号)では、政治学者のアーフィ・バドゥレディンの論稿を参照しながら、ハーバーマスの協同的翻訳論における「翻訳」が指し示すものについての議論を確認した。その中で、ハーバーマスが唱える翻訳のプロセスを経た結果生まれるものは、元々の宗教的言説に備わっていた宗教的な意味が失われたものであり、全く別の意味体系として構築されたものである、という論点を確認した。

これを踏まえた上で、宗教的市民と世俗的市民の間にある非対称性についての議論を少し振り返ってみたい。以前に参照した議論で、宗教的市民が直面する非対称性の一つに、そもそも宗教的市民にのみ翻訳の必要性が求められ、翻訳なくしては政治的決定のプロセスから排除されてしまうことを挙げた。バドゥレディンはこの同じ論点について、哲学者のクックの議論を参照しながら、別の角度から論じている。すなわち、ハーバーマスの見方では、「宗教的市民が翻訳に反対する可能性、言わば『離脱する選択肢(exit option)』を奪ってしまっており、それによって宗教的市民のコミュニケーションの自由を抑制してしまっている」というわけである(Badredine 2015: 500、筆者訳)。

つまり、宗教的市民にのみ翻訳という行為が求められるという非対称性は、裏を返せば、宗教的言語を翻訳せずに政治的な討議に参加する自由が奪われているということになる。この指摘に、翻訳によって生み出されるものは、宗教的市民が本来伝えたいものとは異質なものであるという点を加味すると、宗教的市民が政治的な討議に参加するには、自らの信念とは本質的に異なる内容を主張するしか方法がないということになり、その非対称性の度合いの強さがより鮮明になるだろう。

## 「翻訳不可能性(untranslatability)」

ハーバーマスの唱える翻訳の内実を話を戻すと、バドゥレディンの論稿ではもう一つ重要な点が挙げられている。それは、翻訳そのものの「不可能性」についての議論である。

言うまでもなく、宗教的言語の「翻訳不可能性」は、ハーバーマスの議論に限らず、翻訳にまつわる学術的議論の中で様々な論じられており、成田道広が本誌で連載していた「宗教言語の翻訳」(第8回~第11回)の中でも触れられている。その中で成田は、エイヤーの議論を参照した上で、「宗教言語の対象は、人知によって理解しうる、あるいは客観的に検証しうるものではない」ため、「言語によってそれを定義することは不可能である」という点を指摘し、そこから宗教言語におけるメタファーの役割について論じている(成田 2018: 6)。

バドゥレディンの場合は、宗教的言語を世俗的言語に翻訳するという文脈の中で、この翻訳不可能性について取り上げている。バドゥレディンは、ハーバーマスと哲学者クックの議論を眺めながら、両者が宗教的言語の真理内容の全てを翻訳するのは不可能であると示唆しながらも、あくまで翻訳可能な部分ばかりに目を向けているとして、「宗教の中にある翻訳不可能なものに対して十分な注意を払うまでには至らないのである」と指摘している(Badredine 2015: 501、筆者訳)。そして、宗教的な言語は、完全に翻訳可能でもなく翻訳不可能でもないから

こそ存在し続けるという哲学者デリダの議論を参照した上で、以下のように述べている。

これはつまり、「宗教的理性」の翻訳を求めているという点においては、ハーバーマスは正しいということの意味する。なぜなら、宗教的な文章に綴られた宗教的理性は、翻訳することによってのみ救い出され存続できるものだからである。しかし、翻訳をすれば誰にでもわかる言葉づかいが生まれると信じている点については誤っている。なぜなら、ハーバーマスが「宗教的理性」の中に求めるもの、それはすなわち真理内容のことであるが、それはそれ自身が孕む翻訳不可能性によって、必然的に完全にはなり得ない翻訳(a necessarily impossible-to-complete translation)を通して存続することになるからである。これが意味するのは、「宗教的理性」の真理内容は、それ以外の意味体系に翻訳可能であり、また翻訳不可能であるということである(Badredine 2015: 502、筆者訳)。

そしてそこから続けて、ハーバーマスが「宗教的市民と世俗的市民がお互いに学び合うことで宗教的貢献の真理内容が翻訳可能になること」、そして「それによって生み出された翻訳の内容に両者が合意できる可能性があること」を議論の前提としていることを指摘した上で、「宗教的体験や内容の中には、ハーバーマスの言う誰にでもわかる言葉づかいに翻訳できないもの、すなわち、『宗教性』という性質を失わずには宗教的貢献の外に伝えられないものがあるといえる」と指摘している(Badredine 2015: 502、筆者訳)。

さらにバドゥレディンは、翻訳不可能なものの中には、宗教的市民が政治や生活のあり方について討議する際に重要となる内容があるのを踏まえた上で、宗教的市民と世俗的市民が翻訳を協働して行うことに加えて、「全ての市民が宗教には翻訳不可能である側面があること、そしてそれが正式な政治の場面から先験的に除外されるべきではないということを受け入れるべきである」と論じている(Badredine 2015: 503、筆者訳)。

論稿の最後には、公式・非公式両方の政治的な場面において、宗教的内容の中にある翻訳不可能なものを受け入れる余地を設けるために、ハーバーマスが主張する「誰にでもわかる言葉づかい(a generally accessible language)」に代わって、民主主義のどの瞬間においてもすべての市民が「容易に一般化できる言語(a language that is accessibly generalizable)」こそが必要であると提唱している(Badredine 2015: 504、筆者訳)。つまり、ハーバーマスが等閑視している翻訳不可能なものに目を向け、その存在を除外するのではなく引き受けた形での翻訳のあり方を提起しているのである。

## [引用文献]

成田道広「伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で—(11)—宗教言語の翻訳④」『グローカル天理』19巻6号、2018年、p. 6。

Badredine, Arfi. 2015. "Habermas and the Aporia of Translating Religion in Democracy." *European Journal of Social Theory* 18, no. 4: 489-506.